



暁のオルビタ

ヨスガラ ヒネモス

Reincarnation
TALES of THE ABYSS
GuyAsch by Littera

暁のオルビタ
 ～ Reincarnation ～

☞ 目次 ☜

第一章	嘆きの図書室と少年のミニステリウム ……	7
第二章	古き唄に招かれし普遍のフランマ ……………	33
第三章	偉大なる咎人に約束されたムンディ ……	51
第四章	象牙の塔と優しい忘却を破るカヴェア…………	77
第五章	歪む箱庭の夢を解きしアポストロス ……	105
第六章	世界を辿るはディルクルムの軌跡 ……………	143
第七章	暁の軌跡 ……………	169
エピローグ	……………	195
あとがき	……………	202



本書は2007年8月から2008年9月まで不定期で発行されたコピー本をサイト再録し、さらに加筆訂正したものです。

初出一覧

2007.08.17. 暁のオルビタ 1
 2008.02.03. 暁のオルビタ 2
 2008.03.16. 暁のオルビタ 3
 2008.05.03. 暁のオルビタ 4
 2008.07.03. 暁のオルビタ 5
 2008.09.15. 暁のオルビタ 6
 2008.09.28. 暁のオルビタ 7





第一章
嘆きの図書室と
少年のミニステリウム



カ
バ
ー
イ
ラ
ス
ト
／
ス
ズ
シ
ロ

硝
子

涙など、とうに枯れ果てていると思っていた。

「こたびの大詠師ご就任、まことにおめでとうございます」

ローレイ教団の礼拝堂で、ガイはトリトハイムに膝を折っていた。

ローレイが解放されてから一ヶ月。世界は目まぐるしい早さで変化していた。預言、そしてレプリカの処遇。この二つが中心となって、オールドラントは変革の渦中にあった。教団の再編もその中の一つで、預言なき今、そもそも預言を司っていたローレイ教団の意味が問われている。

導師イオンと、ヴァン、モース、リグレット、シンク、そしてアッシュの詠師ら五名。一度に大勢の幹部を失い、残った詠師はトリトハイムとカクタビレのみ。水面下でユリアシティが実権を握っていたとはいえ、人々の生活にローレイ教団は根ざしている。新しく大詠師を置き、また混乱を收拾させるためには他にも人間が必要だった。導師の処遇は、それからだ。

「どうぞかしこまらず、ガルディオス伯爵」

トリトハイムの穏やかな声が、ガイをうながす。立ち上がった使者に微笑むと、トリトハイムは続けてガイの言祝ぎを受け取る。

「新年の大祭に間に合つてピオニー陛下は胸を撫で下ろしておいでです。いかに預言がなくとも、新しい一年を迎えるには区切りがあるというもの。民から信頼の厚いトリトハイム大詠師

のお言葉なら、皆喜ぶでしょう」

「ありがとうございます」

今までこういった口上を受け取るのはモースだったため、トリトハイムはどちらも落ちつかないようであった。その様子が、変わっていないなどガイをまた安心させる。

「もう少してグランツ詠師もまいります。彼女相手には、昔と変らない態度で接してあげてください」

「もちろんです。むしろそうでないと怒られそうですからね」

ティアもまた、先の戦いの功労から詠師職についた一人であった。本人は嫌がっていたが、アニスが説得したのだ。曰く「ティアの権力で、早くアニスちゃんを導師にしてください☆」。少女の願いどおり、導師に押しやるためか、はたまたそれを止めるためか真意のほどはわからないが。

「あら、ガイ。それは心外だね」

噂をすればなんとやら。トリトハイムの言葉どおり、ティアが礼拝堂の扉から現れた。

「ここは公式の場ですもの。きちんとするのは当然のことよ」

すれ違いざま、ティアはにこりとガイに微笑みかける。

「君も相変わらずだね」

「あなたもね」

微妙にティアから遠ざかろうとしたガイに、少女はため息をついた。

「私はまだ仕事があるけれど、今日ガイが来るってことはアニスにも言っておいたから、後でちゃんと挨拶しに行つてあげてね」

「言われなくても、そのつもりだったさ」

陛下もわかつて、ゆっくりしてこいとおっしゃられたしね。そう付け加えて、ガイは笑った。世界は、変わっていく。

立ち止まることを、振り返ることを許さない。

定められた明日ではなく、過ぎ去りし昨日でもなく、真つ白な未来を、その自由と不安に押しつぶされないように、ただがむしゃらに前へ進むことで平衡を保っていた。

扉を開けた瞬間とびついてきた少女に、青年は理解するより先に条件反射で叫んだ。

「もー。ガイつてば、まあだ女性恐怖症治つてないの？」

「今みたいに突然抱きつかれたら、誰だつて驚くつて」

呆れた言葉とは裏腹に、アニスの声は楽しそうだ。

まだ、ひとつきだ。ひとつきしかたつていない。なのにお互い「変わらないな」などと思つ

てしまうほど、あの戦いが遠い昔のように感じられる。

「今日は仕事ないのか？」

「ガイが来るからつて、特別に暇をもらつちやつた。つても、フオンズタカローディン導師守護役なんて、もうあつてないようなもんだし？」

「あ、すまない……」

ガイは己の軽率さを恥じた。しかしアニスは気にしたふうでもなく続ける。

「そんな辛気臭い顔しないでよう。今はティアのお手伝いしてるから、暇を持て余してるわけじゃないんだ。それより座つて座つて。もうすぐフローリアンも勉強が終わつて来るから、みんなでお茶にしよう」

一立ち話もなんだからと、アニスはガイを部屋の中へ招く。

「じゃあ、ちょっと準備してくるから待つてね」

何かあつたら、他の教団員が来てくれるようにしておくからと言ひ残し、アニスは給湯室へ向かつた。

そして、程なく少女の言つた通り、フローリアンが姿を表した。

「ガイさんこんにちは」

「こんにちは、フローリアン。元気にしていたかい？」

礼儀正しくお辞儀をする少年に、ガイも席を立つて挨拶する。

「うん。勉強はいやだけど、アニスがよろこんでくれるから、毎日がんばってるよ」

「はは。そうか、えらいぞフロリアン」

頭をなでると、少年は誇らしげに胸を張った。と、そこで少々荒いノックの音が扉の下方から響いた。

「ガイ、開けて」

アニス、足は行儀悪いぞ。青年がそう呆れながら少女の要望に従おうとするより早く、

「アニスだ！」

フロリアンが一目散に扉を開けた。

「うわあ。フロリアン、もう来てたの」

目を丸くする少女に、少年は嬉々として答える。

「オリバーがね、ガイさんが来るからって、少し早く終わらせてくれたの」

「そっか、パパもたまには気がきくじゃん。さ、フロリアン、ガイにお茶をいれてあげて。

この間習ったから、出来るよね？」

「うんっ」

アニスの両手を塞いでいた盆を受け取ると、しっかりと足取りで少年は茶器をテーブルの上へ置く。まだ砂時計が落ちきっていないので、フロリアンは先にキーキを配る。ガイはその様子を感慨深く見つめていた。

「どお？ フロリアン成長したでしょ」

「ああ」

アニスが小声でガイに言った。まるで自慢の息子を披露する母親のような少女に、ガイも自身を重ねてしまう。

「昔を、少し思い出すよ」

「ガイ……」

二人の視線の先には、早く落ち切らないかと砂を見つめる少年がいる。しかしアニスもガイも、本当に見ているものは別々の――まったく違う者だ。

「フロリアンは、イオン様じゃないよ」

「もちろんだ」

「フロリアンの名前が、たとえば『イオン』でも、あたしはイオンっていう名前のフロリアンとして接する」

「アニス、一体急にどうしたんだ」

少女の声は、落ち着いてはいたが棘を充分に含んでいた。察しの悪い青年に、とうとうアニスは席を立てて叫ぶ。

「もう、ガイの馬鹿！」

「アニス？」

突然罵られ困惑する青年の問いには答えず、少女はフロリアンに駆け寄る。

「ごめん、フオーク忘れちゃったから取りにいってくるね。お茶は先に飲んでいいから」
「うん、わかった！」

アニスは一度も顔を上げぬまま部屋を出ていった。

薄暗い廊下をアニスは歩く。足元の四方に分裂した影が、自分を責めているようだ。普段は乳白色で優しく通行人を見守っている光源であるが、気分一つでこんなにも印象が変わってしまう。

（あーもうあたしってば最低！ ガイに文句言っただってなんにも始まらないのに。……でも、ガイだって）

自分も、ガイ同様認めたくないものの一人だ。

けれど、彼はまた微妙に違う。事実と真実に耳を塞いで、仮初のゲンジツを生きている。いや、生きているのか。ただ息をしているだけだ。

『昔を、少し思い出すよ』

そう言ったガイの眼が、忘れられない。

フロリアンを見ていれば、嫌でもイオンを思い出す。しかしそれは仕方のないことで、けれどもアニスはフロリアンはフロリアンであると最初から知っている。イオンを思い出すことが悪いのではない。思い出しても、イオンを求めないことが重要なのだ。わかっている。難しいことである。気を抜くと、無意識に昔の、イオンといたころの自分に戻ってしまう。ルークのように、元々別の人間であるとわからなければなおさらだろう。

フロリアン。イオンレブリカ。ルークレブリカ。被験者^{オリジナル}。

アッシュは死んだ。それが事実。けれど、ガイはアッシュそのものを殺している。故意にアッシュを意識しないように無意識に制御している。

（ガイは、アッシュを盲点にしているんだ。ルークを思い出しても、そこで終わり。ちゃんと受け入れないと、いつか破綻しちゃうよ）

それが杞憂でなければ、どんなにいいか。

ガイがアッシュをどう思っているかはナタリアから聞いていた。キムラスカとは、レブリカ問題で教団と往々に行き来がある。ティアとナタリアが話し合いをする場に、自然とアニスもいた。ナタリアはきちんと彼女なりにはじめをつけている。けれども、ガイが心配だと王女はため息をついていた。改めた決意のやり場を失って、それでもわたくしちに普段と変らず接する姿が痛々しいと、なにより肝心なことに結局気付いていない。そう、以前会ったときの様子を話していた。

こればかりはガイ自身がどうにかするしかない問題だ。だが、仲間としてなにかできないかとアニスは思うのだった。

三人分の紅茶を注ぎ終わると、フローリアンは椅子を引き客の着席をうながした。

「さあどうぞ、めしあがれ」

「いただきます。——うん、うまいよフローリアン」

さつそくひとくち口に含むと、こうばしい香りが鼻腔を満たした。続けてもうひとくち飲むと、胃の腑からじんわりと暖かな香りが広がる。

「よかった。まだおわかりあるから、たくさん飲んでね」

「フローリアンは飲まないのか？」

「アニスが来るまで待ってる！ ガイさんはお客さまだから、いいんだよ」

「フローリアンは、本当にアニスが好きなんだな」

「うんっ、大好き！ でも、アニスはぼくがそう言つと、うれしそうに笑ってくれるんだけど、ときどき目が悲しそうなんだ」

うなだれる少年に、ガイはかける言葉がとっさに見つからなかった。そんな客人の様子を察してか、フローリアンはすぐにまたいつもの無邪気な表情に戻る。

「そうだ、ねえお茶のみ終わつたら、三人で遊ぼう！」

「もちろんいいとも」

ガイは子供に気を使わせてしまった己を恥じた。優しいフローリアン。いつか本当のことを話しても、彼が彼を表す名のままでいられるようにと、ガイは祈らずにはおられない。

「ぼくね、かくれんぼが一番好きなの。教団のなかも覚えられて、えーとイツセキニチョウ？ だから。この前も、また新しいところを覚えたよ！」

「そうか。じゃあケーキ食べ終わつたら、腹ごなしにかくれんぼでもするか」

「やったあ、ありがとう」

「ごつめーん、おまたせ☆ フォーク持って来たよ」

フローリアンが手を上げて喜んだところに、アニスが息せきって入室してきた。

「アニス！」

フローリアンの笑顔が何倍にも輝く。さつそくアニスから受け取ったフォークを配り、少年はガイにお茶のおかわりをいれた。

「いただきます」

ようやくおあずけをくらっていたケーキをほお張ると、フローリアンはアニスに先ほどのかくれんぼの話をする。

「うんうん。わかったから、ほら、食べながら話しちゃ駄目って言ったでしょ」

「あつ、ごめんささ」

よほど三人で遊べるのが嬉しかったのだろう。アニスにたしなめられて、ようやくフロリアンは落ち着いていた。

「ごめんね、ガイ。ハタチ越してるのにかくれんぼなんてさせちゃって」

「それは嫌味か」

「べーつにー？　——なんてね。うそうそ。こつちこそつき合わせちゃってごめんね」

先ほどとは違い、普段どおりのアニスに、ガイは安心する。軽口の応酬に、始めフロリアンは目を白黒させていたが、二人が笑っていたのでそういうものだとな納得した。

「いや、気にしなくていいよ」

「ありがとう。でも気をつけてね。最近教団内で新しい怪談スポット誕生したんだから」

アニスが神妙な顔つきで厳かに言う。しかし頬が笑いを堪えているのか、ヒクヒクと痙攣していた。

話によると『開かずのトイレ』『数えると段数が変わる階段』『ダアトがさまよう空中回廊』『血の涙を流すユリア像』『夜な夜な訓練所に出没しては勝負を挑む教団兵』などなど、教団内はそういう話のこと欠かないらしい。

「でえ、今回加わったのは『子供のすすり泣きが聞こえる旧図書室』です。隠れるときは注意してね。これも噂だけど、かくれんぼしててそのまま見つからなかったことが……」

アニスの顔の下からスポットライトが当たる。フロリアンは神妙に喉をならした。ガイは

ガイで話半分である。

「もお、ガイつてば怖がつてくれないからつまんなーい」

「まさかティアをそれでいじめてないよな」

「失敬な！　いじめてなんかいませんよう」

ティアは怪談が苦手だ。キムラスカの王女ならともかく、反応を楽しむには絶好の相手である。すぐさま否定したアニスだったが、語調は上ずっていたので凶星だったのだろう。

「アニス、今の話本当なの」

「だーいじようぶ、もし何があつても、フロリアンはこのあたしが全力で守るから」

アニスはどんと平らかな胸を叩く。そんなたわいもない話をしていると、あつという間にテーブルの上には空の食器しかなかった。

「じゃあ、片付けついでにあたしが鬼になるよ」

二人が隠れているあいだに、ティーセットを戻してくるとアニスが提案する。二人は少女の提案を受け入れ部屋を出た。

「ガイさんこつちこつち」

「いたた。急ぐのはわかるけど、廊下を走るのは危ないって」

手を引きながら先を駆けるフロリアンを、ガイはなんとかいさめようとすが、少年はいっこうに速度を落とさない。小さな体のどこにそんな力があるのか、手のこうに食い込む白い指

が振りほどかれることを拒む。

扉をくぐり、階段を降りる。

また扉をくぐり、階段を降りる。

見覚えのある道順に、ガイはおのいた。

「フロリアン、まさかさつきアニスが言つた旧図書館に向かうつもりなのか!?」

「そうだよ」

フロリアンは振り向かない。いつも通りの明るい返事なのに、なぜかガイは違和感を覚えた。

「そりゃあ、ああ言われれば隠れようとは思わないだろうから、旧図書館にいれば裏をかいで見つかりにくいかもしれないが……」

「助けてあげて」

「え？」

最後の扉が開く。お互い旧図書館に一步入ったところで、フロリアンは止まった。

「フロリアン、一体なにを」

「ガイさんにしか、できない」

いぶかしがるガイの手を離れたかと思うと、次の瞬間フロリアンは扉の外側に立っていた。ガイはとっさに手を伸ばす。それを遮って、重い音と共に目の前が遮断される。

ガイは、旧図書館に閉じ込められてしまった。

「フロリアンツ、いたずらにもほどがある」

青年は外に届くよう声を張り上げた。しかしフロリアンは答えない。いや、それどころか気配さえない。鍵はついていなかったはずなのに、不思議と扉は開かなかった。外からかんぬきでも掛けてあるのだろうか。いや、しかしそんなものさつきは見当たらなかった。ガイは再度呼びかける。

「フロリアン！」

……え——ん

「っ、」

青年は息を呑んだ。

自身の声に被さつて聞き漏らしそうになったが、確かに今一瞬、かすかではあるが何か聞こえなかったか。叫んだ声が響いたにしては、声の質が違ったと思う。

正体を見極めようと、ガイは耳を澄ました。

呼吸の音。心臓の音。己以外、空気を震わせるモノなど、ここにはいない。埃の積もる音さえ聞こえそうなほど、静寂が詰め込まれた空間。

そこに

——う……ぐすつ